

我が人生と空手道

昭和45年機械工学科卒山田一夫 記

空手との巡り合い

父が柔道の有段者だったこともあり、強くなるため小学6年から柔道を始め数年間は父の友人の柔道場に通った。

中学・高校では、柔道部には入らななかったが、武道への興味は持ち続けていた。

高2の3学期で、秋高野球部が春の甲子園大会(昭和40年第37回大会)に出場することに決まり、応援団結成にあたり、直ぐに応募して応援団の一員となり、甲子園での応援に参加した。(大会では1回戦11回延長の末、静岡高校に惜敗。)

応援での振り付けの中に空手の技があることから、武道である空手に興味を持ち、高3の1学期に通学途中にある修武館手形道場に数か月通った。空手は、身体が鍛えられるだけでなく、護身術としての武道であることを知った。

夏の甲子園大会(昭和40年第47回大会)にも出場した秋高野球部の応援団として、連日の真夏の暑い中での応援を通して、自分の求めている武道は空手ではないかと感じた。(大会では準決勝まで勝ち進み、準決勝で優勝校の三池工に1点差で惜敗。)

高3の大学受験時期には、将来は世界の人々と一緒に海外での仕事をしたいという「海外志向」が強くなり、海外生活において空手が必ず役に立つと考え、秋田大学合格が決まった時には空手道部に入部することを決意した。

秋田大学時代

入学後すぐに空手道部に入部した。稽古を始めてまもなく、先輩・後輩の上下関係が厳しいことが分かり、先輩皆様からの厳しい指導を受け、とにかく自分の身体を鍛えるために1年生時は夢中になって稽古をした。

菊地先輩が主将の時代には、競技空手として勝つための練習量が多くなり、同期には自分より運動神経抜群なのが4-5名居り、彼らに組手ではなかなか勝てないと感じつつもいずれ大きな大会に出場することを目標に稽古を続けた。

3年生の終盤には自分の決め技でポイントが取れるようになり、4年生では下記の通りいくつかの大会に出場することが出来た。

① 第5回東日本大学空手道選手権大会に副将で出場(成績:ベスト8)

② 第20回東北地区大学総体(空手大会)に副将で出場(成績:優勝)

③ 第1回全国都道府県対抗に副将で出場

(成績:2回戦で優勝した東京と対戦し惜敗。)

(この大会の2回戦で自分に回ってきたときのスコアは1-2であった。審判が上段好みであったこともあり、上段技あり2本を取って2-2とし、後は大将の小松君に任せたことを鮮明に記憶している。大将戦の結果は小松君の寄稿文を参照願いたい。)

空手道部 4 年間の最終年度でやっと空手道部の戦績に少しは寄りしたと自負している。

思えば、1 年生時に 20 名以上いた同期が 4 年生の血判式では 11 名となり、4 年間厳しい稽古に耐え抜いてきた充実感と達成感は一生涯忘れられないものとなった。

その時から、自分のモットーは「不撓不屈」と決めている。

会社時代

1) 昭和 45 年にプラントエンジニアリング専業会社である千代田化工建設(株)に入社した。運動部は相当数あったが、空手道部は無かったので空手を練習する機会は無かった。

会社は、国内のみならず海外向けの石油、石油化学、化学プラント等の建設を行っており、私は主に海外プロジェクトに携わったことから、海外顧客との打合せ、海外ベンダーの調査・打合せ、ベンダー製作機器の検査等で海外に行く機会が多かった。(短期出張は 100 回以上、長期出張はサウジアラビア 2 回、台湾 1 回、インド 1 回、訪問した国は 20 か国以上。)

海外(特に治安が良くない国)への出張時には、空手道をやっていたおかげで、いつでも自分の身は守れるし何事にも屈しないという自信を持って海外生活を過ごすことが出来た。

また、本社での仕事において、大規模なプロジェクトに携わった時は、契約上の工程・納期を厳守するために長時間残業・休日勤務を苦にせず業務を遂行した。これも厳しい空手の稽古で鍛えた体力と培った精神力のおかげで出来たことだと思っている。

2) 入社数年後に、職場での慰安旅行の幹事だった時に、鬼怒川温泉に行くことになった。その時、スポーツイベントとしてソフトボール大会を企画し、(今思えば恐ろしいことでしたが)町役場にお勤めしていた沼尾先輩にお願いして、町営グラウンド、塁ベース等をお借りして無事に幹事の大役を果たしたことを思い出す。職場の宴会が終わったところに沼尾先輩からお声がかかり、職場の若手数人と出かけて近くの飲み屋でご馳走になった。(大学時代は怖い大先輩であったが、、、)なんと優しい大先輩であろうと感激した次第である。

3) 入社 7 年後の昭和 52 年 3 月に秋田で結婚式を挙げた時に、当時監督だった同期の藤原君の心遣いで、昭和 51 年第 27 回東北地区大学総体(空手大会)において個人戦で優勝した西本君に型の演武をして頂き、家族や出席者の皆さんに本物の空手を披露することが出来て嬉しかった。

4) 入社 8 年後に、サウジアラビアのリヤドに建設した日量 10 万バレルの石油精製プラントの加熱炉の工事監督として、約 1 年半海外長期勤務に携わった。その時、サブコンの三興製作所(配管工事担当)に 1 年後輩の稲垣君が工事監督で勤務しており、加熱炉との取合いの配管工事の件で時々打ち合わせしたこともあった。日中 40℃を超える厳しい気候の中、海外での同じ建設現場で後輩と一緒に仕事をしたのは奇遇であった。

相武館

2年後輩の石川君が自分と同じ相模原市内の近くで師範として空手道場を運営していたことは知っていたが、仕事が忙しいこともあり稽古に顔を出す余裕が無かった。ところが、8年前(平成23年)の4月に狭心症になりステント置換手術をした結果、仕事よりも自分の健康が第一であることを遅まきながら悟り、またそのころ相武館道場へ稽古に通っていた菊地先輩からの勧めもあり、5月から道場に月1-2回参加することになった。突きも蹴りも全くスピード感がない状態ではあったが、子供達と一緒に体を動かしていることに充実感を味わった。毎年恒例の相武館の大会にはほとんど顔を出し、試合での子供たちの成長を見るのが楽しみになっている。また、年末の納会終了後は石川師範、菊地先輩を含め6名でミニ忘年会を開催し楽しい時間を過ごしている。2年程前から頭痛等で稽古に参加出来ていないが近いうちにまた稽古に参加したいと思っている。

鍼灸ストリーム治療院

平成25年の秋田大学空手道部OB会にて4年後輩の伊藤隆司君が先生として鍼灸治療院を開業しているのを知り、持病の腰痛と股関節痛等の治療及び健康管理のため、平成26年1月から当初1年半はほぼ毎週、平成27年6月の左股関節手術後はほぼ2週間に1度のペースで鍼治療のお世話になっている。おかげで健康を維持できており、また昔話や最近の話題についての伊藤先生との治療中の会話が楽しく、鍼治療は今後も継続すると決めている。

結び

空手の稽古によって鍛えられた体力と精神力のおかげで、厳しい社会人生活を何とか切り抜けてきたと思っているが、空手道を通して得た同期の皆さんとの友情及び先輩・後輩とのお付き合いは自分の人生の中でかけがえのないものであり、今後も皆さんとの友情・お付き合いを大事にしたいと思っている。なお、来年の東京オリンピックでは、空手の競技に是非孫息子たちを連れて観戦したいと思っており、孫息子の中で1人でも興味を持って空手を習うことになれば嬉しい限りである。

以上

記念写真/東北大会空手道団体優勝(前列左端が筆者)



学生時代4年間の空手道

昭和45年電気工学科卒小玉宗雄 記

今まで秋田大学空手道入会のホームページに寄稿されている先輩、同輩、後輩は、すでに学生時代にその強さを認められ、そして卒業後も空手を続けて、空手に対して一つの見識、愛着、情熱を持っている方々です。しかるに私の空手との関わりは学生時代の4年間だけで、その間の戦績でもちよっと迫力がない。それでも空手を通し、自分の弱さを克服し、誇りと自負を得た入部から血判式までの4年間の思い出を書いてみる。

<入部動機>

中学3年生の時に年上の不良に難癖をつけられ、小突き回されても抵抗が来ず、されるがまま終わってしまった経験があった。これがトラウマとなりだれにも負けないよう強くなり、身にかかる火の粉は自分で振り払いたいと常々思っていた。正義感は強いが臆病な少年だったのです。そんな折、高校の軟式野球部で出会ったのがこれ全身火の玉ファイターの塊である若木先輩でした。秋田大学に運よく合格した時、若木先輩の後を追って空手道部に入部したのは自然の成り行きでした。

<空手のイメージ>

私のただ一つの不安は、空手はスポーツではなく、まさに今流行の部内DVなど強い、古い体質を持っているのではないかという危惧でした。まさか国立大学でそのようなことがあるはずは無いと思い入部したのです。入部してまもない或る日の稽古中、ジーパンに革ジャン風の二人連れが道場に現れ、新入生に正拳突きの指導を始めたのです。その風貌、話し方から、やはり空手部には何か如何わしさがあるのか？と啞然としたのを覚えています。これがOB懇親会の最長老で優しさ、気遣いがにじみ出る話振りを含め、私の敬愛する沼尾先輩との出会いでした。幸にも不安は杞憂に終わり、今宿所の消灯時間に遅れて帰った時、連帯責任の正座1時間などの厳しい指導の基で、激しい稽古が始まったのでした。キャプテン工藤先輩の稽古初めの黙想の掛け声と5条訓の斉唱は雑念を振り払い稽古に集中する真摯なものでした。また先輩の道場内での稽古中の洗練された立ち居振る舞いは憧れだったものです。

<痛い稽古>

新入生当時の私は、体力的な面では自信を持っており激しい基本稽古を樂々となしていた。当時の東京スポーツ新聞の見出しに「ジャイアント馬場 驚異のスクワット500回」と載っていたが我々には毎日茶飯事のことだったのです。しかし組手稽古を行うようになってから空手は痛いということを知

ったのです。巻き藁突き、前蹴りを腕で払った時、顔面に正拳を受けた時、突き指をした時、それはそれは痛かった。特に菊池先輩は私にとって“壁”のような存在でした。重厚な構えから、じりじりと寄ってきて繰り出す突きと蹴りには敵わず、たまに逆突きを打っても弾き飛ばされるのでした。卒業してからもたびたび空手部時代のことを夢に見ることがあったが、一番多く出てくるのが菊池先輩でした。

<組手で勝てない>

私が2年生（昭和42年）頃から秋田大学空手道部は第一期全盛期を迎えました。菊池先輩の東北大会個人戦優勝、東日本学生団体戦3位を初めとして各大会で好成績が続くのです。これは須田監督、諸先輩のご指導による所が大きかったと思う。一連の稽古体系と独創的な稽古方法を取入れ、前に出るだけの戦いから多彩な戦法を教えて頂きました。

このような状況下にあって、私自身は進歩が無く、組手で勝てない日々が続くのでした。団体戦代表として5名枠に入れず、対外試合には出られないことが一番の悔しい思い出です。試合に負けると間合いとか、踏み込めとか、スピードとか自分に足りないことを考えて、それなりに稽古したが、技量、気迫の差を埋めることは出来なかった。

<同期>

私の同期はキャプテンの小松、カウンター上段の藤原、中段逆突き伊藤、重い突きと蹴りの山田、軽快な本田、豪快な蹴りの鈴木、俊敏な小野、粘りの佐藤、猪突猛進の石橋、マネージャーの相沢と多士済々です。初対面から血判式までの4年間、初志を貫徹し最後までやりきったすばらしいライバル達でした。特に機械科の連中には空手以外に勉強でも世話になり、留年することなく卒業できたのでした。

<現在>

スポーツとの関わりは、ジャンルを問わない日本人アスリートの戦いをテレビ応援する位です。東京オリンピックの空手のボランティアに応募を考えたが諦め、必ず武道館へ行き生で見ようと決めています。大沢在昌の新宿鮫こと鮫島警部、北方謙三の大水滸伝シリーズの登場人物、北斗の拳のケンシロウを今もこよなく愛する71歳、国民の勤労の義務を實踐中です。

<最後に>

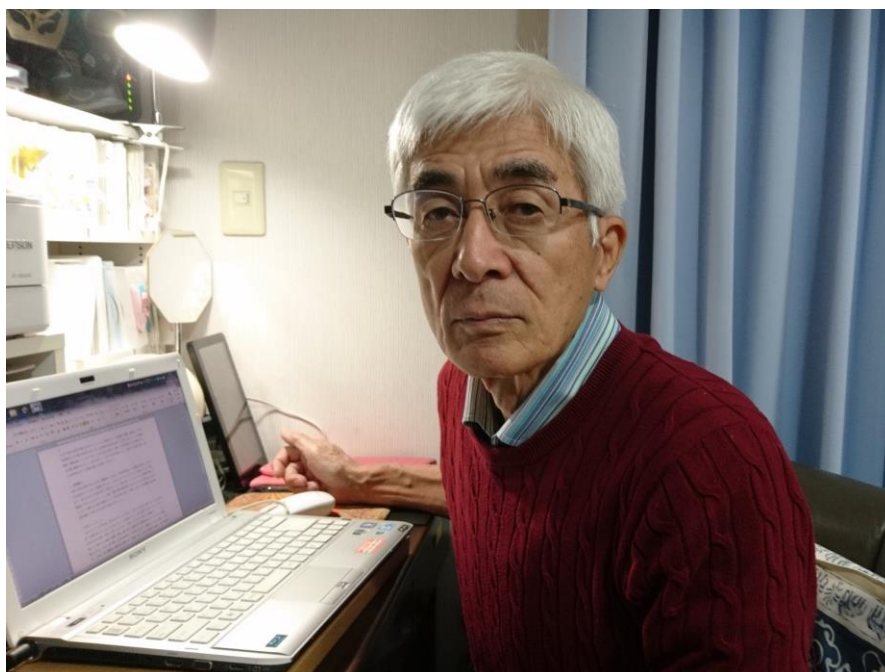
空手習熟という共通目標を目指す仲間と過ごした4年間は最初の入部目的を十分達成し、さらに以後49年間の社会人生で私の支えとなっています。礼儀、質実剛健、団結互助、尚武の気風 素晴らし言葉です。これを實踐出来たことも素晴らしいことでした。皆様に感謝申し上げます。

今回登場の先輩、同輩を私のイメージで、且つ無断で書かせて貰いました。

ご容赦ください。まだまだ印象に残っている諸先輩、後輩がいますが次回また機会を頂いた時として下さい。秋田大学空手道人会の発展と皆様のご健康を祈念しております。

押忍

記念写真/執筆中の筆者



冬令宿と野戦病院

昭和44年機械工学科卒 風間広太郎 記

昭和40年に新潟高校から当時の鉾山学部機械工学科に入学した。

秋田市手形の鉾山学部北光寮のすぐ目の前の手形西谷地に下宿した。田んぼの中で周りに大きな建物は北光寮だけという新興住宅地であった。

当時朝晩の賄2食がついて一月8500円と記憶している。

北光寮には多くの先輩空手部員が寄宿していた。

記憶の限りでは速水さん、森さん、小原さん、国井さん、早田さん、渡部さん、殿田さん、芳賀さん、宮本さん、それに寮生ではないがなぜか手塚（沼尾）さんなどそうそうたるメンバーがいて空手部が幅を利かせていた。

我下宿の真ん前の村上さんというお宅があり奥さんが秋田大の健康保険室（野戦病院）の院長さんであった。小柄で色白なメンコイ感じで、当時はこちらが若かったせいか、もう相当のおばさんであったように感じていた。

そのころ冬の令宿では最終日の総仕上げが旭川に入ってから寒げいこであった。令宿期間は4日間か、5日間ぐらいであったろうか。道場の隣にあった令宿所から市民に一番目に付く川反の旭川まで、雪というか氷に固まった道路をワッシュヨイワッシュヨイと裸足で駆け抜け号令一下、川に入り込み正拳突き、型三戦を披露し、そのころには新聞社やら一般市民が参集してきているので、さらに意気込んで気合を入れたものであった。

帰りは大勢の見守る中、意気揚々とは裏腹にあまりの寒さに足の感覚もなく、風にあおられ道着がバリバリに凍ったまま、やせ我慢をし走りに走り、ストーブ、ストーブと唱えながら令宿場にたどり着いた。一斉に足をストーブに向けた。すると面白いもので足中にマメがポコポコと浮き出してきた。俺は何個出た、俺のほうが多くてカッコいいとか、今から思うと他愛ないことで大いに盛り上がっていた。これも苦しい令宿から解放される、という安堵感があったからだったと思う。そこからが野戦病院の出番であった。

村上野戦病院長のところへ行き、なんとマメにヨードチンキを注射してもらう、という荒療治をしてもらうのであった。

その時の痛いことと、しばらくしてからの恍惚感は今から思うと何だったのか。この荒療治が効いたのか効かなかったのか定かではないが、空手部の多くが野戦病院にてヨードチンキを注射してもらっていた。

今がしたと云うのは、薬をもらいに行き、飲みすぎたと云うのはベッドに寝て休み、その令間に歴代の諸先輩の悪行の話をよく聞いたものでした。

懐かしく思い出されます。

記念写真/真冬の旭川での寒げいこ（奥の列で一番後ろが筆者）



記念写真/雪道のランニング



半世紀

昭和44年教育学部卒松谷健 記

古希を過ぎた時には何の感慨もなかったのですが、2017年2月に半世紀ということが身近に思われることがありました。

50年前の5月に石川県金沢市で第4回東日本大学空手道選手権大会がありました。1回戦千景敬愛経済大と4-0、2回戦東京大と2-1、3回戦神奈川大と3-0、4回戦東京理科大と2-1、準決勝慶應大と1-3、3位決定戦東洋大と2-1で、秋田大は第3位という結果でした。先鋒藤原(S45年卒)、次鋒小野(S45年卒)、中堅若木(S44年卒)、副将鈴木(S45年卒)、大将松谷(S44年卒)というメンバーでしたが、次鋒小野君の活躍は今でも目に浮かびます。間合いをうまく計っての素早い中段逆突きでした。次鋒は負けが意かかったかもしれません。主将で中堅若木は4勝1分1反則負けで、私は2勝1敗3分けでした。

ある時、この事が秋田高校の東京同期会(?)で、1年先輩の菊地さんと慶應大の鎌田氏の間で話題になったようで、詳しい経過は分かりませんが、当時のメンバーを中心に慶應大と秋田大空手道部OB懇親会が行われる事になりました。双方6名づつ併せて12名の参加者でした。当日私は秋田からの田舎者ですから最初に会場に着き、その後来られた世話役の慶應大鎌田氏と挨拶を交わしていたら、ある人から「半世紀ぶりですね。」と声を掛けられました。慶應大の主将(対戦時の大将)奈藏稔久氏でした。

お互いに対戦した時間は3分間で、かつ頭髪が薄くなっているのに、良く私のことが分かったものだと言いました。幸い私は対戦時の写真を持っていましたので、貴重品でしたが差し上げました。奈藏氏は当時の写真で黒々とした頭髪のイメージしかなかったので、私は全然気が付きませんでした。ただ、瞬時に50年前にタイムスリップしました。

奈藏氏は、現在世界空手道連盟事務総長で、日本オリンピック委員会監事等の要職に就かれています。空手がオリンピックの種目に決定と報道された時、テレビでその姿を拝見しました。

私が秋田大空手道部のことで嬉しく思っている事は、後輩の石川幸雄君(S47年卒)と伊藤隆司君(S49年卒)が、大学卒業後も空手道の指導、普及に尽力していることです。2人共教育学部卒業生であったので、私は同学部の啓明寮で1年間石川君と寮生として寝食を共にしました。両君の今後の益々の活躍を期待しています。私は38年間の教職生活後、自活会活動に関与する以外に特別なことは、現在していません。年金生活を続けていますが、皆様の活動ぶりを参考にして今後の飛躍(?)を考えます。

記念写真/東日本大会（前列左から2人目が筆者）



私と空手道・あれこれ

昭和45年機械工学科卒小松克男 記

[学生時代]

① 空手道との出会い

中学・高校と卓球に夢中になっていた事から何の迷いもなく卓球場に足を運んだ。そこで、初めて空手を目のあたりにし「自分を鍛えたい」気持ちが一気に沸き上がり空手道部入部を即決した。(当時は空手道部と卓球部は同じ建物で練習していた。)

② 第4回東日本大学空手道選手権大会(堂々の3位)

活躍の状況については松谷先輩が既に記載されているとおりです。

4年生(若木、松谷、風間)、3年生(藤原、鈴木、小野、小松)の7人で石川県体育館に勇躍乗り込んだ。体育館に到着して直ぐに須田監督に呼ばれ「今回、小松を使う予定はないから道着は着なくてよい。」と言われた事を今でも思い出す。3位入賞の記念真の中の私は学生服姿である。自分の不甲斐なさ、力不足を恨み、無念の思いであった。尚、この大会で獅子奮迅の働きをした同期の小野君が、その後は怪我に泣かされ思うように活躍できなかつたことは残念なことであった。

③ 主将指名

若木先輩が私を主将に指名したのは11月の全日本学生空手道選手権大会の前であった。私の知る限り、歴代主将は誰もが認める人格者であり、実力者であった。しかし、私の力は同期の藤原君や鈴木君に遠く及ばず、多くの関係者は小松で大丈夫だろうかとの疑念を持っていただろうと思う。大きなプレッシャーを感じながらも、「この部をまとめていくには自分が一番ふさわしいのだ。」と故無き自信を胸に秘めて稽古に汗した日々であったが、同期10人に支えて頂いてどうにか最後まで全う出来たことはありがたい事であった。

④ 4年生時の戦績

- ・第5回東日本大学空手道選手権大会(武道館) ベスト8
- ・第20回東北地区大学総体(秋田大学付属中学校体育館) 優勝

1回戦対岩手医科大学5-0、準決勝対東北学院大学4-0と下し、順調に決勝に勝ち上がったが弘前大学との決勝戦は苦戦を強いられた。先鋒から大将戦迄全試合が引き分け、代表決定戦でエースの藤原君の勝利でやっとの思いで勝ち取った初優勝であった。大将だった私は「私が負けなければ勝てる。死んでも負けられない。」の一心で戦った試合であったが、それにも増して最後の勝負を託された藤原君のプレッシャーは相当なものであったろうと思う。

- ・第12回全日本大学空手道選手権大会（武道館）ベスト8
- ・第1回全国都道府県対抗（武道館）

秋田県の代表として秋田大学メンバーで出場した大会であった。一回戦を順調に勝利し、2回戦は協会指導員で困めた東京との対戦であったが、何と大将の私に2-2で回ってきた。東京敗戦を期待する会場からは「秋田頑張れ」の声も多かったが、私は簡単に敗れてしまい残念な気持ちとみんなに申し訳ない気持ちで一杯であった。私の対戦相手、飯田紀彦は翌日の個人戦を制した強者であった。

前年度の東日本3位という輝かしい戦績とは比べようがないが、いずれの大会においても秋田大学の實力は遺憾なく発揮できたのではないかと自負している。

[オリンパス社員時代]

① 空手道部入部

「男一匹、一人で生きていく」と粹がって就職は学校の世話にはならず、自分で就職先を決めたのだが、驚いたことに何と会社に空手道部があったのである。空手道連盟、山口師範（8段）のもと20人ほど部員がおり、金沢大と千葉大の空手道部出身者も含め7~8名の黒帯が在籍していた。更に人事部長が空手道部顧問であった関係で直ぐに声がかかり有無もなく入部させられた。

② 活動

秋田大学空手道部の實力を知らしめなければどの思いが強くなり少し気合を入れ過ぎた。若気の至りで組手では全く遠慮しなかつたこともあり、古株の黒帯が次第に稽古から遠ざかるようになってしまい、和気あいあいと運営されていた部活動に水をさす結果となってしまった。新体制でキャプテンとなり、会社の全国体育祭で模範演技を披露したり、渋谷区の大大会に出場したりと何とか頑張っていたが、山口師範の退職や私の転勤などが重なり部活動を維持できなくなり廃部となってしまった。尚、私自身はオリンパス空手道部入部5年目に全日本空手道連盟より4段を認可された（實力の伴わない4段です）。その後、あちこち転勤先で会社の体育館や社庭で一人で稽古していると必ず二人や三人、教えて欲しいという者が現れて40歳頃まではたまには稽古着に袖を通す生活が続いた。

しかし、会社後半は仕事も多忙を極めるようになり自然と空手とは縁遠くなってしまった。

③ 先輩とお付き合い

- ・入社して暫くたち会津オリンパスに勤務していた丁度その頃、菊地先輩も会

津で仕事をされておられ、時折、寿司屋から電話を頂きご馳走になることもあった。しかし、当時の自分は新事業の立ち上げで息を継ぐ間もない忙しさで、先輩の電話は嬉しくも大きな恐怖でもあった。

- ・時が経って、会津オリンパスの社長時代に地元の経営者協会慰安旅行で鬼怒川温泉に出かける機会があった。折角なので沼尾先輩に連絡させて頂き、経営者協会の夕食を中座することになっていたのだが、何と宴会開始早々先輩から「迎えにきたから直ぐに下りてこい」と連絡があり、協会会長に頭を下げ下げ言い訳をしながら急ぎ駆けつけることになった。

その晩は客二人だけのスナックで飲みつぶれる程にご馳走になり、二人ともママさんの車で送り届けて頂いた。

先輩とは何とも只々ありがたくそして少々厄介なものである。

[相武館]

- ・石川君から「相武館道場5周年に石郷岡師範が来られるので、先輩も都合をつけて出席して欲しい。」旨の案内を受けて同期の藤原、山田、小玉、本田君らに声をかけて出かけてから早33年になる。石川君が38年の長きにわたって営々と築き上げてきた空手道場であるが、教師の職務をこなしながらの道場運営には我々では伺いしれない沢山のご苦勞があったに違いない。彼の空手に注いだ情熱と頑張りには尊敬の念を抱くのみである。そして、今現在その恩恵にあずかっている我が身の幸運に思いを馳せ、只々感謝するのみである。
- ・2011年6月の株主総会をもって会社を辞し、さてこれからの人生どうしようかと思案していた時に、菊地先輩から「石川君が病気で指導が十分にできないから、応援に来い。」と声をかけて頂き、相武館に週2日通うようになった。それ以降、石川君の好意に甘えて全ての面でかなり気ままにやらせてもらっているが、当初は学生時代に習った空手と道場の空手とのギャップに戸惑うばかりであった。それでも何とか子供たちに指導できるのは学生時代に諸先輩にきちんと基本を指導して頂いた賜である。
- ・相武館では菊地先輩、山田君と共に稽古に汗しているが、相武館の年末納会終了後は小玉君や伊藤君も交えて秋田大学空手道部ミニ忘年会を開催して旧交を温めている。卒業して50年にもなろうとしているのに学生時代そのまま楽しい飲み会の一つとなっている。
- ・最後に、ここ数年の体力の衰えは如何ともしがたく、稽古前の「かけっこ」では幼稚園生にも敵わない悲惨な状態である。それでもそこに自分の居場所があるように感じられることは実に嬉しいことで、石川師範に「そろそろどうですか？」と耳打ちされるまでは何とかお世話になりたいものだと思っているこの頃である。

記念写真/師範、監督、同期11人(前列左から2人目が筆者)



一 空手道人のその後

昭和44年機械工学科卒業若木誠 記

会社をリタイヤして九年そして六回目の年男を迎えた。

寄稿依頼を気安く引き受けてしまった後何を書けば良いものかと思案した。

大学生時代は誰より質・量とも濃く・多く稽古してそれなりの結果を残して秋田大学空手道部の知名度向上に貢献したと自負しているが卒業後は空手道着を着たことすらない。ただ、実社会で難局に直面した時は“厳しい稽古に比べれば何のこれしき。”の気持ちで乗り切ったことは幾度もあった。また、空手を通して人や仕事の繋がりを得たり広がったりもした。そこでソフト面（表現適否不問）中心の一秋田大学空手道人のその後を紹介することとする。

私は昭和44年に三菱金属鋳業(株)(現在三菱マテリアル(株))に入社し瀬戸内海国立公園区域内にある直島製錬所に学卒六人と赴任し、私を含む工務技術系の四人は建設事務所に配属になった。

当時直島製錬所は100億円以上を投資した増産設備建設工事の真っ盛りだった。私は複数の熔鋳炉がある二つの工程で現場研修することになったが初めて見る装置・設備・工程は複雑かつ設置エリアが広く初めから多忙極まりなく、加えて瀬戸内特有の厳しい暑さとも戦い続けなければならなかった。休暇は月1乃至2日しか採ることができなかったが、不断に勤め何とかその年の12月の竣工式に臨むことができた。稽古で鍛えた体力が物を言った感ありだった。

直島製錬所にはその後2年間通算3年間勤務した。その後四人(一名殉職)は同一場所で勤務することはなかったが今でも苦楽を共にした同士として賀詞交歓等を続けている。

昭和47年に三菱原子燃料(株)東海製作所に転社になった。会社生活の大部分関わった原子力関連事業及び秋田大学空手道人や他大学空手部出身者等との直接・間接的な関わりの始まりである。

当時の原子力関連事業は社会から好意的に見られていた。さらに一次石油ショックで原子力発電に対する期待が大きくなった。それに伴い東海製作所の設備増強計画も増加した。

原子力設備の新設・変更の際には都度科学技術庁(当時名)の厳しい審査・検査があり審査に必要な書類は詳細且つ多量だ。また、工事計画は出荷計画優先のためどの段階も時間との勝負だった。

30歳代前半の私が一人任された業務では最終段階の2日間一睡もせず仕上げた(仕上げざるを得なかった。)こともあった。流石にこの時の事は辺りの景観が真黄色に見えた事だけしか覚えていない。兎に角期限内に作業を終えること

ができたのは矢張り気概と頑丈な身体があったからでしょう。

三菱原子燃料(株)及び三菱マテリアル(株)へ復社後の業務は原子力施設の設計から建設までのエンジニアリングである。

三菱原子燃料(株)時代に慶応大学空手部昭和50年卒の人物が三菱マテリアル(株)から転社して資材部門に配属になった。接触する機会が多い部門であり飲み会で“君の先輩たちと第4回東日本大会準決勝で対戦した”話や対戦した相手のその後等を話題に歓談した。すっかり打ち解け後の仕事円滑化に繋がった。

原子力エンジニアリングでの競合社の日揮(株)に日本大学空手部44年卒の人物がいた。同社の技術者には“筋は客に対してでも強力に押し通す”面があり、正論であるが協力し難く思うことが多かったが偶々彼と一緒にしたプロジェクトで、彼の相手の立場に配慮した言動に同社に対する印象が変わったような気がした。空手経験が穏やかにしたかどうかは別として彼のお陰でこのプロジェクトはその後円滑に進行した。

原子力関係関連の顧客に慶応大学空手部昭和44年卒で第4回東日本大会に出場した人物がいたことを後年知った。二年前に前述東日本大会出場選手同士の半世紀ぶりの再会の段取りや慶応大学空手部会報等を配信してくれる鎌田敏氏である。私の東海製作所勤務と同時期に彼は東海村や人形峠の事業所に勤務していたようだ。有力な顧客だけに接点を作り得なかったことを悔んだ。

東海村と東京の事業所を行ったり来たりして原子力エンジニアリング業務に従事していたが、平成13年に(株)テクノ大手(現在(株)三菱マテリアルテクノ)に転社した。同社東北支店(仙台市)を經由してテクノ本社に戻り環境と原子力技術を統合した事業部を創設して直接担当した。

テクノ総務部に防衛大学空手部44年卒の人物が自衛隊経由で入社してきた。彼も第4回東日本大会に出場して慶応大学と対戦したことや卒業後は対戦メンバー同士で定期的に会合していることも知った。彼は私と東北仙台駐屯署に仕事探しに付き合ってくれた。彼はかなりの高官だったので仕事には繋がらなかったが、駐屯署トップが丁寧に対応してくれた。

同期空手道人の風間君とは今でも公私にわたり付き合い合っている。

東芝に入社した彼からは私が本社勤務後半に東芝製の効率・経済性に優れたエアコンシステムを紹介・納入してもらい顧客に感謝された。新規顧客向けに納入ルート等はテクノ社後輩に引き継がれているはずだ。

45年卒の小松君には彼の所長時代に世界一の性能といわれるオリンパス光学工業(株)の内視鏡製作所を彼の案内で見学した。部品の一つ一つが優れた職人でなければ作れない精度・仕上がりである。我が社がお手伝いできるものは何もないと納得させられた。彼は同製作所の第一期生で製作所成長の原動力だった。

同じく45年卒の藤原君には彼が立ち上げた会社のFRP製品の紹介を受けたこと

があつたが生憎取引はなかつた。しかし、後年三菱原子燃料(株)東海製作所の主要工程に彼の製品が納入されていることを知り嬉しく思った。

45年組の頑張り・成果に敬服するが、彼ら以外にも実社会で活躍している【秋田大学空手道人】は多くいるでしょう。健闘祈ります。

結びは全くの私事であるが、仙台で悠々(?)自適の今の私の一日は早朝ウォーキングで始まる。途中にストレッチを取り入れ全身実施後2~3分四股立、三戦立そして息吹で締める。道着は着ていないが唯一の空手稽古である。健康長寿を目的に今後も一連の運動を続けることを記述して終える。

記念写真/ウォーキング出発前



秋田大学空手道部卒業50周年にて

昭和43年機械工学科卒業菊地茂 記

平成30年5月24日10年振りに大学のクラス会が有り16名の出席があった。宴たけなわの頃改めて自己紹介と近況報告を各自がすることになった。同姓の菊地氏が同席していたので小生の言葉は、空手で入学し空手を全うして卒業した菊地です、と口火を切ったら皆頷いている様だった。まさしくそういう4年間であったのだ。思い起こすと、入学したら秋田高のレスリング部の2年先輩が空手部に居り、声を掛けられていたので入部しようと心に決めていた。高校時代の部活で足腰はそこそこ強かったと思う。昭和39年4月から新入部員として稽古に励んだ。空手道部の初印象は、4年生3人が凄く大人に感じた齋藤世紀主将、宇佐美巖氏、高橋巳代洛氏(猛牛を思わせる人)、特に齋藤、宇佐美氏は紳士的で下級生を怒ることもなく、率先して引張っていくタイプで、突き齋藤、蹴りの宇佐美、迫力の高橋であった。

高橋先輩は上背は175cm程度だが、体重は90kg近かったと思う。私はしごかれた。酒を飲まされ過ぎた次の日に保健室(野戦病院)で寝ていたら、偶然高橋先輩が入ってきて「貴様!何をやってるんだ、今から稽古だ!」とか、級友が社交ダンスを習いに行っているので自分も何度か行った。それが高橋先輩の知るところとなり「インチキセックス」はやめろ!と凄いい剣幕で怒鳴られ、二度と行くことは止めました。その年の東北総体が6月にあり、空手道の会場は秋田大体育館であった。私たちは会場係で、こまめに行ったり来たりフル活動でした。おそらく先輩達は上位入賞だろうと、試合だけはちゃんと見ようと心掛けた。特に高橋先輩の試合は圧巻で、猫足立ちでジリジリと間合いを詰めると、大概の相手は下がる一方であった。しかし小柄でも試合巧者の相手は下がりながらも一瞬回り込み、遂突きで遂転していた。それが決まりポイントを失った。結局当時の私には考えられなかった。確か記憶ではベスト8に誰も入らなかった。もしも寸止め競技でなかったら、3人の先輩に勝てる人は居なかったのではないか。

我大学から入賞者が出なかったことが本当に寂しかった。これで2年生後半から3年生にかけて、競技空手である以上勝たなきゃしょうがないとの思いが増々強くなった。しかし古来からの一撃必殺は根底に残さなければならぬ。3年生になって当時4年の主将は工藤先輩で、矢張り試合に出て良い成績を残さなければならぬという気持ちは同様であった。先輩は形にも意欲的で、立派な形を演じておられた。我々はセイエンチン止まりだったが、先輩はセーパイ等何種目かに挑戦されていた。当時は対外試合に出ても監督不在であった。正

式にどなたかにお願いしようと石郷岡師範、佐藤忠師範(拓大OB)に相談して、須田先生にお願いした。少額ではあるが、毎月の監督料もきちんとお支払いもした。先生は剛柔流全国大会で3位入賞されいて、油の乗りきっている時期でもあった。指導に見えられる時は、土崎の自衛隊の勤務を終えてから単車で道場まで来られていた。以降数年間指導を続けてもらった事も、空手部の発展の一因となったのではないか。

春休み、夏休みには、合宿の費用捻出のためのアルバイトも、そこそこやった。また上京して松濤館流の全国大会を観戦したりした。さらに東京での大会(殆ど日本武道館)終了後、拓大で恒例の交換稽古があったので、単独で何回か稽古させてもらった。というのも、その頃どういうルートで手に入ったのか、図解入り空手教本の著者が拓大教授の中山先生であった。この冊子には逆突き(腰を切る)の分解等殆どが写真入りであった。これを読んだら「目から鱗」とはこの事だとはっきりと自覚させられた。基本から全て科学的に分析している内容が掲載されていた。記憶に多少残っている事は、攻撃のとき逆突き(中段)の腰の回転(腰を切る)、順突き(上段)の前足に瞬間的にウェイトを預ける、前蹴りは腰を送り込み瞬時に引き足を取る。後は組手の戦法的な内容だったと思う。

4年になった当時毎日の稽古に参加していた部員は、1年生を入れると40名近くいた。

体力強化の為、腕立て(拳立て)、腹筋、足曲げ(スクワット)には時間をかけ、皆必死に大声を出していた。それから基本、基本移動(特に四股立ちには時間をかけた)、後は順を遅っての約束組手、自由組手だが、息の抜けない稽古で毎日3時間近く汗をかいていた。

あの薄暗いイメージの小体育館(道場)が今でも目に浮かぶ。もうとっくに解体になったのだろう。試合が近づくと監督自ら試合形式の審判で、出場候補の選手主体で何試合も行った。

何よりも相対して構えたら絶対に下がらない、各自は審判にアピール出来る決め技を持つ、これはやかましく指導を受けていた。私は個人として強くなりたい気持ちは人一倍持っていた。しかしそれ以上に下級生をみるにつけても、これだけの選手が揃っている空手道部を、何とか立派な成績を残せる強い運動部になって欲しいと毎日の様に思い続けていました。卒業してから、後輩の東日本大会第3位の成績とか、東北総体団体優勝、個人優勝、藤原君の世界選手権大会出場等の話を聞き、胸にジーンと迫るものがありました。また、思い出すのは秋田市産業会館のステージで形の演武をしたり、部活動資金確保のための空手道部年2回主催のダンスパーティは、安心感があったのか盛況であったと聞きました。校内合宿も何回かやりました。石郷岡師範が見えられたら稽古後合宿所へ移動し、皆でリラックした格好の師範を囲みました。そこで師範

は昔話を長時間されてから帰宅されるのが恒例でした。

象潟海岸や戸賀湾で夏の合宿をしたことがあるが、海辺で彼に向かったの蹴りはきつかった。

何よりも苦しかったのは砂浜でのランニングだった。今年も暑い夏がやってきましたが、いまだに大学時代の夏合宿の稽古を思い出します。そして卒業時の血判式は昭和17年度から続いている伝統行事であるが、行方不明であった血判書が見つかったと聞いた。

では秋田市内のパトロール時に纏った羽織、袴、天端を良くあれだけピカピカにした学帽、鉄下駄、それらの行方はどうなったであろうか。

4年生の夏に全日本学生個人選手権及び東西対抗が、大阪府立体育館で開催された。ここで試合の経験談になるが、確か東北地区代表で出場したと思う。個人2回戦で立命館大の巨漢選手と対戦して、二度顔面に当てられて反則勝ちした。試合経験はかなり豊富であったが、顔面に当てられたというのは初めてであった。相手の技が見えていない試合であったということは、試合では勝っても勝負では負けたということか。さて、続く3回戦で当時優勝した法政大の手嶋選手と対戦した。双方ともポイントを取れずに突入した延長戦で、技の応酬となり中段突きで自分の方が早かったと思った。然しながら相手は同時に上段突きを出していた。審判の旗は相手側に上がった。どうしても審判の目は中央の見慣れた選手にひいき目になるのかと今でも口惜しい気持ちになる。東西対抗戦では岡山大の選手と引き分けであった。単独で乗り込み何かあっさりとした感があるが、全国から選抜された各選手と会えて、その試合振りを見れた事は良かったのかなと思っている。

その年秋の秋田県選手権大会が大学生最後の試合となりました。当時身長がせめてあと6cm高ければ、空手で飯食っていこうかなと考えた事もありました。大学卒業後50年経って考えると、空手の道は大学時代の4年間だけでは吸収しきれない未知の部分が、まだまだあるのだと後年思い知らされた。それは10年程前に一念発起して、後輩の石川師範主宰の相武館に、たまに顔を出し稽古着を身に着けた時であった。子供達と一緒に体を動かしていると、体の柔軟性が全くなく、動きのスピードが落ちていた。これは中々修復できるものではない。古希を過ぎると意欲が低下して稽古を休みがちだが、子供達と一緒に大きな声を出して汗をかくのは良い事だと思っている。毎年一回のOB会、それ以外にも先輩、後輩から便りが届く、何とも嬉しい事です。わが人生も最終コーナーになってきましたが、秋田大空手道部で燃えていた事を誇りに思い、毎日を大切に送っていきたいと心に決めております。

記念写真/相武館合宿 (左より筆者、石川先輩、小松先輩)

